

Zero Sum Short Stories

零和短編集

15

いくさば

竿姫戦場磔



陰門篇

濠門長恭

目次

身代露見	二
苛烈拷責	一九
竿姫淫惨	五〇
戦場磔晒	七四
後書き	八六

身代露見

「遠慮なさいますな。我ら三人、先の御小姓と同様に召し使ってください」

帯に手をかけられて、三日目にして早くも露見するのかと、梅女は覚悟を決めざるを得なかつた。

兄君の身代りとして双子の妹を差し出すなど、元より事が成ろうはずもないのだ。そのあたりは父君も十二分に承知して、そのうえで……

領主である馬手良実^{めてよしざね}への挨拶は、唐辛子を葛根湯で煎じた微毒で潤れた声とにわか覚えの男言葉で切り抜けたものの、国から伴った小姓を退けられ、見張を兼ねた青年を付けられては——昨日の一日だけでも誤魔化しおおせたのは上首尾であらう。

衣服を剥ぎ取られて、幾重にも巻いて乳房を締めつけた胸が露わになる。

「これは……敵地に在るというお覚悟の発露でありましょうか」

深手を負ったときに臓物がこぼれるのを防ぐために、胸や腹に晒布を巻くのは武人の嗜みである。

「されど、そのままの姿で風呂を使うとなれば、あまりに無作法でござるぞ」

晒布に手をかけられても、梅女は抗わなかつた。今を切り抜けたところで、汗に濡れた晒布を着け続けるわけにもいかぬ。

晒布をひと巻き解いたところで、名目は小姓頭ということになっている元波^{もとなみ}の手が止ま

つた——のは、一瞬。

「まさか。いや、これは……」

落ち着きを失った手で晒布を剥ぎ取り、まろび出た膨らみに目を丸くした。大の男の掌にすっぽりと収まりそうな、しかし紛れもない女人の乳房。

「御免っ」

元波が下帯に手を伸ばした。

「あつ、何を」

手を振り払いながら後ずさった梅女だが、元波は逆にその手をつかんで引き寄せ、下帯の前布を筆り取った。

そこに魔羅は生えておらず、淡い叢の奥に刻まれた縫処ほとの筋。

ひと呼吸ほどの間を置いて、驚愕から立ち直った元波の動きは果断だった。素早く梅女の背後へ回りこんで片腕をねじりあげ、もう一方の腕を喉に巻きつけた。

「曲者でござる。お出会い召されよ」

戦場では喊声に掻き消されるだろう甲高い声で叫んだ。

近くに居た者どもが、押取り刀で駆けつける。

しかし、風呂上がりの間にはそれらしい人影は無く、華奢な小姓に押し拉がれたいつそう華奢な女人の裸形があるのみ。慌てて目をそらして、いや此奴が曲者かと、まじまじと見詰め直す。

国元から伴った小姓たちに見られるさえ羞恥を克服できぬのに、片手に余るむくつけき男どもの視線に曝されて、梅女は生きた心地もない。

気がついてみれば、床に引き倒され後ろ手に縛されていた。

そうこうするうちに領主までが、太刀持ちの小姓を従えて姿を現わす。

まつなおぎみ

「松直君を裸に剥けば、この有様です」

「ふむ……」

奇襲に仰天しては、武將は務まらぬ。まして、男の人質が女に化けたくらいでは。

こんなところでは詮議もなるまいと、梅女は然るべき場所へと、裸形を緊縛されたままに追い立てられた。引きずられたのではなく、先に立てられて脇差の峰で尻を敲かれて追われたのである。このあたりにも、すでに馬手良実の嗜虐が顔をのぞかせている。

然るべき場所。大きめの館に小川ほどの堀を巡らせた陶分城すえわけに比べれば、縄引で倍する泥科城どろしな。郭内に牢獄もあれば責問せめといの土間もある。

梅女は、その責問の場へ引き据えられた。

土間へ押し座らされた梅女の前に良実が立った。直々に取り調べるつもりらしい。その場に居るのは、件の御小姓三人と太刀持ち。他に、偉丈夫と小男。小男といっても、梅女よりは頭半分の上背があり、体軀の幅は五割増か。その他に、粗末なお仕着せの郎党が二人。

九人もの男どもに圍繞された、全裸を緊縛された一人の小娘。しかし、それでもまだ足りぬらしい。

「下緒で縛すなど、実に手ぬるいのう」

小男が荒縄の束を手にして、梅女の後ろに片膝を突いた。

「しばし、時をお貸しくだされ」

主君に断わつてから、梅女の緊縛を手際良く解いた。が、手首を撫で擦る暇も与えず、前よりも高く腕をねじ上げて、交差させた手首を肩甲骨の高さで縛った。

「くう……」

痛みに呻くのは氣にも留めず、長い縄尻で胸を二巻きした。縄に絞り出される態で、乳房が突き出る。小男は乳房をつかんで、さらに引っぱり捏ね繰る。

「なんと貧弱な乳じゃ。これは、男に化けるのも容易かろう。されど……」

二本目の荒縄を首に緩く巻いて、双つの乳房の間で上下の胸縄を絞った。さらに縄尻を左右に分けて腋の下を通し、そこでも上下の胸縄を絞る。上下左右を縄に縊り出されて、腕を伏せたような形だった乳房が、今にも胸から転げ落ちそうな鞠と化した。

「リョウイよ。殿を差し置いて、ひとりで遊ぶではないぞ」

「なんの。きちんと荷造りをしてから献上するのが、作法でござろう」

とは言いながら、下半身までは荷造り、をせずに、小男は裸体から離れた。

この男、こう見えてもいちおうは徒士組の組頭である。名を当塚亮威とうづかりやういという。もうひとりの、頬に刀傷を刻んだ偉丈夫はれつきとした侍大将で、氏は辺延野へのみなの、諱が茂兵衛もへえ。

二人の身分は違えど、主君が手ずから若い女子おなこの折監あるいは責問を致すときはお相伴、違つた、お手伝いをしている。

亮威が手控えると、郎党ふたりが立ち働く。

三角の柱を寝かせて敷き詰めたような十露盤責の座に梅女を正座させて、後々の都合が良いように膝を一尺ほど開かせた。生きた心地も無く怯え動転していても、女の本能で足を閉ざそうとするのを、両側から膝頭をつかんでの無理強い。

それだけでも脛に三角柱の稜線が食い込んで、梅女はその痛みに顔を歪める。

「うぬは何奴じや。何のつもりで松直殿に化けた。国から伴った小姓どもは承知の上か。

そもそもが、くにみねしょうじやく国嶺正雀の謀りごとか。有り体に白状せぬとあれば、痛い目に遭わせてくれようぞ」

矢継ぎ早に浴びせられかけて、何からどのように白状するかと、戸惑う梅女。もはやこの場に及んでは、隠し立ても言い逃れもできぬと、女ながらに腹を括っている。いや、そもそも。たとえ実父の命とはいえ、兄のためとはいえ、ひいては国嶺の家門を守るためとはいえ、そこまで忠義を尽くす謂れなど無いと、実のところは思っている。国嶺の家が減ぼうが、養家を取り潰されようが、梅女の知ったことではない。

しかし馬手良実は、梅女の戸惑いを逡巡と受け取った。

「載せろ」

主君の短い下知に従って、二人の郎党が脇に積んである畳の半分ほどの石板を一枚抱え上げて、梅女の腿に載せた。

「ぐうう……痛い」

梅女が呻く。

三角材の稜線が脛に食いこんでいる。

「素直に吐かねば、二枚三枚と重ねてくれるぞ。五枚も積みば脛が碎けて、足萎えになると知れい」

当主みずからが吟味にあたるその声は、妙に喉に絡まっていた。

また殿様の悪い虫が頭をもたげた——と、眉をひそめる家臣などいない。男であつてみ

れば、か弱い乙女を蹴つてもみたいというのが、本音であろう。

もちろん、梅女は男の暗い本音など知らぬ。

「何もかも話します。どうか、この石を除けてください」

「そうか。もう一枚所望するか」

二枚目の石板が重ねられた。

ゴトリ……

「きやああつつ……」

梅女は口を大きく開けて、悲鳴が喉につかえている。じわりと、顔にも肩にも背中にも脂汗がにじむ。

「わ、わたくしは……松直君の、畜生腹の、妹でございます」
喘ぐように、一言ずつを絞り出した。

言うに事欠いて畜生腹などとは、偽言にしては突拍子もなさすぎる。当主は、そこに真実を見たのだろう。

「石を降ろしてやれ」

激痛から解き放たれて、はあはあと梅女は肩で息をした。

「先を話せ。言葉を惜しむなら、三枚を載せてやるぞ」

「わたくしは紛れもなく、場更郷ばさらの領主、国嶺正雀の実子にございます。生まれてすぐに、三田の家へ養子に出されました」

何をどう白状するか考えあぐねて、梅女は出生から今日に至るまでを、すべて語ると決めた。

「ふむ。男女に生まれ分けた女子おなごなれば、直ちに間引かれなかっただけ幸いというものじやな。嶺国のやつ、案外と慈悲深いの」

そうではない。女兒に比して男児が未熟で、先行きが案じられたからだった。未だ他に子を持たぬ国嶺家であれば、もしも男児が亡くなったときには女兒を実子として受け入れる。女では跡目を継げないが、家付女として婿を迎えれば良い。

さいわいというか、梅女には不遇なことに、松丸と名付けられた兄は、どうにか育ていった。全体に線が細く背丈も梅女と変わらぬが、病弱というわけでもなかった。

そうなつてくると、養子を賜った三田家も、梅女の扱いには戸惑う。はつきりと捨てられた子を大切にしては、主君へのあてつけと取られかねない。とはいえ、雑用にこき使うのも躊躇ちゅうちゆわれた。

つまるところ梅女は、飢えさせられたりはしないものの、捨て置かれたのだ。

たとえば、兄でもあり雲の上の存在でもある松丸は昨年うちに元服をして名を松直と改めているのに、梅女は元服にあたる裳着の祝どころか、そもそも髪を結ってもらったことすらなかった。初めて髪を結ったのが男髪なのだから、これはもう、泣き笑うしかない。

それでも、月代を剃るのは初陣のときという慣習のおかげで、前髪を少し切り揃えた総髪だったのが、せめてもの慰めであつたろう。後頭部の小さな鬘さえ解けば、顔形も何とか、線の細い松直に似ていなくもない。だからこそ国嶺正雀は、男女を入れ替えての身代りなどという無茶を思いついたのかも知れぬが。

それは、ともかく。

——この秋に、陶分城あきが攻められた。

つまびらかにいえば、先に国嶺勢が領地の切り取りを目論んで中里郷に攻め入ったものの、現代でいうところの遅滞戦術に翻弄され、手薄になった城を、逆に馬手良実の主力に攻囲されたのである。驚いた国嶺勢は大急ぎで取って返したものの城には入れず、野戦が必至の形になった。

対峙する兵数は二百対三百で国嶺勢が不利。しかも、泥科城からの追い討ちが百。しかし、陶分城にも五十の兵がある。双方が腹背に敵を迎えて戦えば、数の多い側が勝つにせよ、攻城戦を凌ぐほどに兵を損じるであろう。

そこで、強者側の馬手から和議が持ちかけられた。とはいえ、互いに領地を安堵するという一条を除けば、国嶺側の降伏にも等しい。国嶺からは嗣子を入質に差し出すが、馬手からは無しというものだった。

この条件は、一方的に嗣子を入質に取るという以上に重い意味を持っているのだが、それは後段で明らかとなるので、今は語らない。

かくして、梅女は表舞台へ引き出されたのである。生贄として。

単に身代りということであれば、適当な少年を見繕えば済むのであるが。似顔絵はともかく、同年輩に比して小柄であるとか、およその目鼻立ちくらいは領民にまで知られている。間者を通じて、他国へも伝わっている。そして梅女は、男女の違いはあれど、双子だけあって、それなりに顔立ちが似かよっていた。松直は出生時の未熟が尾を引いて、背丈が女並に低いことは、すでに述べている。

今ひとつ、国嶺正雀はとんでもない奸計を巡らせていたのであるが、それは今日明日中にでも暴露されるであろう。

梅女の否応など齒牙にも掛けられぬ。松直君の身代りを実父から命じられ、男の所作だの物言いだのを付焼刃されて。

松直はすでに声変わりしていたが、身体が華奢なせいとか割に甲高い声だったので、最初に述べた微毒で喉を荒らし、腹の底から声を押し出すようにすれば、幾らかは似せることができた。

しかし、そんな小細工は。身のまわりの世話をするのが当方より伴った小姓であれば、そうそうは正体も露見すまい——という思惑もろとも、早々に潰えたのだった。

身代りにされるべく城へ召し出されて、兄に化けさせられただけでなく、梅女は他にも身体を弄られていた。それについては、あまりに羞ずかしいことでもあるし、本筋には関わらぬと判断して、梅女は何も語らなかった。

梅女の、いわば身の上話を聞き終えて、良実はいしばし、梅女の顔といわず体軀といわず、無言で睨めまわしていた。

そして、試すように問いかける。

「このような不実が露見すれば、和議は反故になる。我も城を攻めようとは思わぬが、領地を半分も切り取ってくれよう。それを分かつておるのか」

戦^{いくさ}や政^{まつりごと}など、梅女には分からない。まして、領主の心裡など。

「わたくしは、何も聞かされておりません」

「何も聞かずに、のこのこと乗り込んで来たと言っても言うつもりかッ」

良実が大音声で威しつけた。

「……………」

まさしく、その通りなのだ。いや、言外に——露見は必定。そのときは殺されてしまえという冷酷無慈悲を、梅女は実の父親の言葉の裏に聞き取っていた。

ほんの数日を稼ぐのが、梅女に期待された役目だった。いったんは兵を退かせて城に籠もってしまえば、じゅうぶんおなこに護りおおせる。戦には無縁の女子にも、それくらいは判る。

しかし、そのような事どもまであからさまに語るのは、さすがに恥辱であつた。となれば、黙するしかない。

「そうか。ならば問答は無用じゃ」

良実が吐き捨てた。

「者ども、夜も更けてきた。下がってよいぞ」

松直付きの御小姓三人衆と郎党の二人を去らせて、自身は側近の小姓共々残つた。他に、辺延野茂兵衛と当塚亮威。

「いつもの顔ぶれじゃな」

良実が曖昧につぶやいて、ニタリと嗤つた。

「本格の責は明日にして、今宵は手ほどきをしておくか」

主君の言葉が終わるのも待たず、亮威が梅女を背後から突き倒した。

梅女は顔から石畳の上へ倒れこんで——すんでのところ、胸を辺延野の足の甲で受け止められたのか、蹴り上げられたのか。

「いつもいつも木馬では面白い。人質の身代りなどと、謀りおつて。よほどにきつく痛振ってくれよう」

そのようなことを言われて。梅女はようやくに、責問に使うのであらうおどろおどろし

い道具立てが目に見えてきた。

天井の梁に吊るされた幾つもの大きな滑車と、そこから垂れる鎖。天井の梁にまで届いていない太い柱。三角の柱を横に寝かせて四隅の脚で支えられている台……では、なからう。良実が口にした木馬とは、このことか。その他にも、その一画だけが石畳になっている十露盤賣の場所。分厚い雨戸のような盤は、囚人^{めしうど}を寝かせて縛りつけるのだらう。

その他にも。壁には弦を外した半弓とか竹を裂いて縛り直した棒とか。荒縄や細引紐も、あちこちに捏^{つく}ねられていた。

それらの大道具に架けられることなく、梅女は俯せに土間へ転がされた。その足首に左右別々の縄が巻きつけられ、右足の縄が天井の滑車から垂れている鎖につながれた。

「よいやき」

滑車で折り返している鎖の端を、二人の男が息を合わせて引くと——梅女の身体は軽々と宙に浮いた。軽々とは見た目のことで。宙吊りにされた梅女の身体の重みは、すべて右脚にかかっている。当人には、相当の苦痛だった。

しかも頭に血が下がって、鼻に内側からの圧迫が、これも梅女を苦しめる。

梅女の腰が当塚の顔の高さに達したところで、鎖が壁の鉤につなぎ留められた。折り曲げていた左足の縄が横に引かれて、これは鎖と反対側の壁につながれた。

両足を大きく逆八の字に開かされ、後ろ手に縛された逆さ吊り。

「ああああ……」

一糸まとわぬ姿で逆さに吊られて開脚させられて。もっとも秘しておかねばならぬ箇所を上から覗きこまれる形。梅女はすこしでも脚を閉じようともがくが、わずかに膝が揺れ

るだけで、むしろ男どもの目を愉しませる——などと、気づくはずもなかった。

「さて。強情を張っておるとどうなるか、ちつとばかり教えてくれよう」

良実は梅女の正面にまわって、当塚に向かつて手を伸ばした。当塚が、弦を張っていない半弓を恭しく差し出す。それを手に取って。

ぶんッ。

素振りをくれた。

「拙者は、これにいたす」

長さ三尺ばかりの荒縄を四、五本も束ねたものを手にして、辺延野が梅女の後ろへまわった。

「乾いたままでは、ちと手ぬるいが」

二人がかりで前後から打ち敲こうというのだ。

「責問はお許してください。本当に、ただ兄君の身代りになれと、それしか命じられていないのです」

もちろん、誰も聞く耳は持たない。

「亮威よ。あれをやるか」

「よほどにきつく痛振るのではございませんでしたか。それがしに思案がございます」

当塚が答えた。当塚は壁に幾つも設えられている棚のひとつから、風糸を持ってきた。が、すぐには使わない。

「こやつ、月の障りを見るようになってから間もないようですな。半ばうずもれており申す」

小ぶりの乳房の真ん中に埋もれている蕾を指先で無理矢理につまんで、捏ね繰る。

「痛い……お赦してください」

梅女が訴えると。

「痛いというのは、こういうのじゃ」

爪を立てて、ほとんどもぎ取るほどに引っ張った。

「ひいいっつ」

さらに、もう一方の手で乳房をわしづかみにして、引っ張りひねくり、あるいは餅のごとくに捏ね繰った。

否応なく乳首がぷっくりと膨れた——ところへ、亮威は舐糸を巻きつけて固く結んだ。

もう一方の乳首にも、同じように舐糸を結んだ。

「なんじゃ。いつもと変わらぬではないか」

手持無沙汰に眺めていた辺延野がくさしたのだが。

「いやいや。ここからが、よほどにきつくなり申す」

当塚が梅女の股間に手を伸ばした。指で淫裂を浅く穿って、上へなぞった。

※梅女の身体を基準としての上下である。実際の指の動きは、上から下となる。今後も同様とする。

そうして、淫裂の上端にひそむ肉芽を掘り起こした。

「あああっつ……くうううう」

これまでまったく知らなかった感覚、純粹の快感としか言いようなない感覚に、梅女はむしろ怯えた。しかし肉芽は、正直に硬く膨れた。さらに、包皮を剥かれて。

「いたっ……ひいいいい」

無理強いに剥かれるピリツとした痛みはあったものの、それまでは一度たりとも外気に触れたことのない実核さねを指の腹で撫でられて、梅女の腰がびくんびくんと跳ねた。

が、当塚には囚人けらくに快樂を与える意図は無い。極小の魔羅を思わせる肉芽の雁首のように縊れた部分に、三本目の風糸を巻いた。

「風を操るにも、糸目は三点が要り申す」

実際の風のように、三本の風糸を結び合わせ、糸の端を持って当塚は部屋の端まで下がった。良実と辺延野が、それぞれの得物を手に、梅女の前後に立つ。

「そおれ、揚がれい」

威勢の良い言葉の割には、じわっと糸を引く当塚。

「痛いっ……ひいい、お赦ください」

梅女の訴えなど馬耳東風。ゆるゆると引いては放して。目に見えて裸身が前後に揺れ始めた。

小さいとはいえ、乳房は引つ張られれば伸びる。しかし実核はそうもいかぬ。三本の風糸で引つ張るとはいえ、力の過半は実核にかかっている。

「そおれ。もちつと高お揚がれい」

当塚が腕を下げて、ぐいと引いた。実核の糸だけが、ぴいんと張った。

「ぎひいいいっつっ」

梅女が濁った悲鳴を噴いた。

ぐうんと、裸身が前へ迫り出した。

正面に立つ良実の股座に顔が触れんばかりに迫ったとき。

ぐぼっ……弓の端が梅女の腹に、突き刺さったとしか見えない。

「うべえっ……」

くぐもった呻き声を噴く梅女。振子の勢いに弓で突いた力が合わさって、いつそう大きく後ろへ振れた——ところへ。

ぱしいん……辺延野の縄束が背中に叩きつけられた。

「んぐ……」

痛みは強かったが、胃の腑を挟られる重い苦痛はなかった。

裸身が再び良実に向かって振れる。

ばしん……弓が水平に腹へ食いこんだ。

「ぐぼっ……」

突き入れられるよりは、まだしも耐えやすかった。

当塚が引かなくとも、裸身は揺れ続ける。それに合わせて半弓と縄束が叩きつけられる。五回に一回くらいは胃の腑を挟られる。

赦しを乞うても無駄と、梅女は悟っている。それでもなお訴えるのは、さすがに無様だと、一寸の虫にも五分の気概は残っていた。

背中一面に赤く染まり蚯蚓腫れが走り、腹は赤紫の痣に埋め尽くされて。ようやくに、二人が手を休めた。

辺延野は縄束を投げ捨て諸肌脱ぎになって汗を拭っているが。良実はまだ半弓を手に、梅女の揺れを見定めている風情。その手が不意に動いて。

ぴしりっ……音は小さかったが、真上から股間を打ち据えた。弓がほとんど淫裂に埋ま

った。

「ぎひいつつ……」

梅女は逆さ吊りにされたまま、腰を大きく後ろへ跳ねた。それから、だらんと――裸身が一寸ほども伸びたように見えた。気を失って弛緩したのである。

「ふん。他愛もない。裏干物うらひものにしておけ」

梅女は、いったん土間へ降ろされた。手足を大の字に広げられて、両手首にも縄がつながれた。辺延野が梅女を俯せにして持ち上げる。

「弥太郎殿に手伝わせてもよろしいか」

「弥太、助すけてやれ」

館久弥太郎は主君の小姓であるから、若輩といえど直の指図は憚られる。

弥太郎が手首の縄を、当塚が足首の縄を受け持つて、それぞれが壁の鈎に縄を絡めた。

「よいやさあ」

折り返した縄を二人が息を合わせて引くと、梅女の四肢がぴんと引き伸ばされて。辺延野が手を放せば、傷だらけの裸身が宙に浮いた。

「さて、明日は一刻ばかり早起きをするか」

「それほどに、この小娘がお氣に召しましたか」

辺延野が苦笑する。

「今宵は奥にかまってやらんな。明日は三人に、正体を見破った褒美を与えてやらねばなるまいし」

「ははあ。では、明朝は放ちませんので」

「鉄砲と同じじや。弾籠めには手間がかかるわい」

主従は馬鹿話に興じながら、氣を失つて水平の宙吊りにされている梅女を責問の間へ置き去りにしたのだつた。

ちなみに、褒美云々に言及しておく。良実は、いわゆる両刀遣いであつた。元波たちにも、今すこし幼い時分に手をつけている。

ただし、稚児や小姓は可愛がるのみで、痛振りはいしない。そもそものは若年者への薰陶という側面があるし、後に側近として取り立てるのであるから、恨まれるような真似はできない。苦痛や恥辱が快樂となるように調教するなどという発想は、この時代には未だ無かつたのである。

逍遙は、これまで。

ほどなくして梅女は息を吹き返した。

すでに夜半も近い。格子窓から流れこむ神無月の夜氣は、肌に突き刺さるほどに冷たい。このまま殺されるのだらうと、梅女は絶望に墜ちた。身代りを命じられたときから、いずれは露見して、当然に処刑されるものと思ひ定めてはいたものの。もしかすると、それは半月後やも知れず、一年先かも知れない。いざ明日にでもと迫つてくると、おぼろに垣間見る物の怪の影と、我を呑み込もうと大顎を開いた虎ほどにも、恐怖が違ふのだと思ひ知らされる。

「くしゅんっ」

くしやみをして、はっと下半身を引き締めた。漏らしかけたのだ。

夜が明ければ誰かが様子を見に来るだろうが、それまでもつかどうか。

土間だから地べたが剥き出しになっている。流血にしても失禁にしても、跡始末が手取り早い。氣絶した囚人に容赦なく水をぶっ掛けられる。

いつそ放尿してしまおうかと思案して、やはり我慢を選んだ。漏らせば、からかわれるのは目に見えている。それもまた、一寸の虫にも五分の氣概を削り取られる。

しかし尿意は、責問で受けた傷の痛みと旦夕に迫った死の恐怖から、梅女を幾分かでも遠ざけてくれた。下腹部を引き締める方へ考えが集中したのだ。

——梅女の努力は報われて、尿意を堪え切ったままで、明け六つの鐘を聞いた。一睡もしていなかったが、眠氣を感じるどころではなかった。

苛烈拷責

観音開きの分厚い木戸が開いて、どこかと足音荒く、昨日の総勢——良実と太刀持ち、責問では郎党よりもまめに働く侍大将と組頭。そして人質の松直君に宛てがわれた御小姓実は監視役の三人と。二人の郎党もついてきたのだが、責問の土間の真ん中で女の裸身が宙に浮いていては、さすがに狭い。早々に追い出された。

それでも七人。取り囲まれて好奇や好色や嗜虐の眼差しを注がれて——昨日の梅女なら、羞恥に悶えたろうが。ひと晩ずつと手足を自身の重みよりも強く引つ張られ続けて、重い鈍痛に苛まれている。しかも、今日にでも処刑されるのではないかという恐怖が、余の感

情を麻痺させている。

女への責折監に親しんでいる良実は、梅女の目から光が失せているのを見て取って。

「これでは、面白くない。こやつこやつの世話をするのは、おまえらであろう」

三人の御小姓をけしかける。彼らも主君の聲咳に接し薰陶を受けて、そのあたりは心得ている。

「このままで、お世話を致すのでしょうか」

「苦痛と快楽の板挟みじゃ。見事、極楽へ墜として見せい」

それでは——と、三人が梅女に近寄った。

「これは、昨夜の。解いてよろしいでしょうか」

主君の許しを頂戴して、三人が左右の乳首と実核を縊ったままになっている風糸を解いた。

「あ、あああん……」

ずっと滞っていた血流が甦って、三点がじいんと痺れて。それが、途轍もない快感にながった。

「これでは、我らの出番がありませんね」

三人のうちでは一歳ひととせだけ年長の元波が苦笑しながら、梅女の股間に手を差し入れた。残る二人——猪世いのよと小代こしろも、両脇から乳房を掌に包んだ。

猪世と小代は微妙に流儀は異なれど、もぎゅもぎゅもぎゅと揉むというか強い力で乳房を握る。

「……………」

何を懇願しても無駄と、昨夜のうちに思い知らされている梅女は、唇を噛んで狼藉に身を委ねるしかない。

元波は、他の二人よりは女体の扱いに慣れているらしく、いきなり本丸へ攻めこんだりはしなかった。

股間の淡い叢を指で梳くようにして淫埠をくすぐり、梅女の反応をうかがう。

ぴくりと腰が動いたが、梅女にとってはそれどころではない。宙で俯せにされた身体を水平に引つ張られた四肢で支えるという拷責に息も絶えだえ。これが、昨晚から続いているのだ。

元波は指を進めて、ついさっきまでは風糸に縊られて、今も包皮がたくれたままになっている実核に指の腹を触れさせた。

びくんと腰が跳ねて。

「くうう……んん。や、やめて……」

指の動きに呼応して腰がくねり始める。身悶えすると、その動きが肩と足の付根に伝わって痛みを増すのだが——それよりも、実核を弄ばれる快感の方が強かった。縫処の縁に、うっすらと露が滲む。

それを指先でなぞってたしかめてから、元波はいよいよ淫裂を指で穿った。

「あつ、そこは……」

弄ってはならぬ場所——と、教えられはしなかった。それだけの騷すら、梅女には施されていい。しかし、そこに殿方の魔羅を突き刺されるのだとは、養家の下女の内輪話に聞き耳を立てて知っていた。それは、まだおのれには早過ぎると、おぼろに感じてはいる。

そんな梅女の動揺など知らず。元波は指を進めた。穴が急にすぼまって指を拒むのを感じ取って。

「殿。やはり生娘でございます」早速の御注進。

初物は殿様に賞味していただかねばと、未開の戸を打ち破らぬように、しかし指は進めた。

「ん……」

元波が手を止めた。外から見ても分からぬが、指先で未開の戸の先を探っている。そして、わずかに指を抜いては、また戻す。それを幾度か繰り返してから。

「玉門に何か入っております」

困惑の顔で申し上げてから。

「何を挿れておるのか」

本人に尋ねた。

「それは……子種が子袋へ行かないようにするための覆いです」

そのときのことを、梅女は思い出す。余のことに比べれば、些末事であった。

「荒淫好色で聞こえた馬手良実のことじゃ」

女が男に化けた身代りと露見すれば、きやつに花を散らされるであろう。そうになると極めつけているような、国嶺正雀——実の父親の言いようだった。

みこも

妊娠れば、腹の中の子を道連れに処刑される。それでは、赤子があまりに不憫であろう。

犯されても孕まぬように手当をしておいてやろう。

実の娘は平気で捨駒にするくせに——と、内心は悲哀と憤怒に引き裂かれたものの。未だ妊らぬうちから芽吹いた母性は、国嶺の言葉を肯んじぬでもなかった。

すでに産婆が館へ呼ばれていた。婆の字を宛てるには若すぎる、いや艶すぎる女人ではあつたが。

「生娘は破るなど、殿様のお言いつけじゃからの」

鹿革で作った浅い椀のような代物。縁に鯨の細い髭が縫いつけられている。細長く押し潰して経血の通り道から挿れれば、中で広がって、淫洞から子袋への細路をふさぐ。そのように聞かされた。

生まれて初めての、縫処への異物の挿入であつたが、羞恥にまみれただけで、それほど痛みはなかった。中に何かが入っているという感覚も、半日ほど消え失せたのか、馴染んでしまったのか。

梅女自身、半ば忘れていた。

「どのような物かは知らぬが、中が詰まっていたは具合が悪かろう」

元波は淫洞の中で指を曲げて、その覆いとやらを搔き出そうとした。が、滑ってしまつて、うまくいかない。

「痛い……あつっ」

梅女にしてみれば、未踏の地を指先で圧されたり引つ搔かれたり。鈍い痛みが奔ったかと思えば、何やら甘い心地が湧いてきたりもする。

「これは無理でございます」

元波が指を抜いたのだが。

「いや、待て。気がかりなことがある」

何としても取り出せと、良実が命じた。

「関所の門を打ち破つても、いや、小柄^{こづか}で切り開いても構わぬ」とは、乱暴な。

元波はしばし逡巡してから。

「では……」

指二本を揃えて淫洞を穿った。手首を捏ねて、良実が関所と暗喩した狭い穴を強引に押し広げたのか引き裂いたのか。

「いたいッッ」

梅女が悲鳴をあげたときには、指が付根までずぶつと貫入していた。

二本の指は、子袋の覆いとやらの縁を簡単につまんだ。覆いの拵えを知っていたなら、挿れたときと同様に円形を細長く変えられたのだろうが。元波は無理矢理に引き抜いた。

ぴききつと薄い肉が裂ける手応えを元波は指先に感じ取っていたし、梅女は激痛が腰いっばいに広がった。

「きひいいいいッッッ」

関所を内から外へ打ち破るとは、天地開闢以来の珍事——などと面白がる者が居たとすれば、それは馬手良実くらいであろう。いや、その良実は妙に真剣な目つきで、元波から渡された径一寸半ほどの湾曲した円盤をひねくっていたが。

不意に顔色を変えて。

「生きた鯉を鹽に入れて持ってこい。大根か胡瓜の切れ端も要るぞ」

言いつけられた御小姓三人はきよんとしていたが、頭上から雷を落とされて、バタバタと責問の間から飛び出していった。

すぐに、命じられた二品を持ってきた。

いったい何事と、当塚も辺延野も盥を覗きこむ。

良実は円盤を水に浸して、鹿革の裏面に大根を押しつけた。そこから青い薄い色が水の中に広がり……鯉がバチャバチャと暴れ出して。じきに、腹を上にして水面に浮かんた。

「やややっ……」

「これは如何に」

驚き騒ぐ家臣たち。良実も、いささか顔が強張っている。

「これを見よ」

良実が円盤を盥から引き揚げて、裏面を上にした。なんと、十本を超える細く短い針が飛び出していた。

「獣の腸を薄く剥いで貼り合わせ、隙間に毒を封じる。いざ一番槍と突貫すれば……」

植えられている針が腸皮を突き破って、魔羅に毒を射ち入れる。

「奥の院ならぬ奥の手と、女忍びから持ち掛けられてな」

その話を受けたのか、そうだとし首尾はどうであったかについては、良実は語らなかつたが。

「なんと。では、この女は忍びでござったか」

辺延野が色めき立ったが。

「たわけ。毒が縫処に沁めば、女も無事では済まぬわ」

だから、狙う男の妾などを騙し、あるいは昏倒させて、棘鞆を仕込むのだと、良実は説明して聞かせた。

その言葉は、朦朧としている梅女にも明瞭に理解できた。父上はわたくしに、殺されても已む無しではなく、良実殿と心中せよと仰せだったのですね。

「じゃが、この女は仕込みを知っておった。つまりは、わしを殺そうとした」

そうではありません——と申し開きをしたところで、まさかに信じてもらえたところで、処刑は免れぬ。しかし、梅女の考えは浅かった。

「この罪は重いぞ。斬首や磔では済まさぬ。車裂にしてくれようか鋸引にしてくれようか」

梅女が怯えたふうもないと見てとると、良実は刑罰の詳細を語って聞かせた。手持ち無沙汰なので、梅女の乳房を捏ね繰り淫洞を穿ちながら。

車裂とは、四肢を四頭の牛馬につないで、四方へ追い立てる。被刑者は手足を引き千切られて絶命する。

鋸引は、すぐに息絶えないだけ、さらに残酷かもしれない。大の字磔にしたうえで、手足を一本ずつ鋸で引く。骨までは絶たずにしばらくは生き永らえさせる。そして最後には首を鋸で切り落とす。

聞かされただけで、梅女は気が遠くなった。

「しかし、安堵せい。わしとしては口惜しいが、おまえは殺せぬ。人質があるうちは、国嶺もことを急がぬであろうからな。そのぶん、たつぷりと可愛がつてくれるわ」

「……………」

梅女には、良実の言い分がまったく解せない。

「じゃが、わしの命を狙ったのだから、無罪放免とはゆかぬぞ」

処罰は後回し。それまでは、ゆつくり休ませてやろう。梅女の裸身に、今さらに熱い視線を注いで。

おなこ

「女子を休ませてやる作法は心得ておるな」

と、これは当塚に向けた言葉。

「木馬でござるな」

太刀持ちを加えて四人の小姓に、梅女を地に降ろさせた。その間に当塚は辺延野と合力して、四隅を脚で支えて寝かせた三角の柱を土間の真ん中、滑車から垂れる鎖の下へ運んだ。

しかし、すぐには梅女を乗せない。わざわざ胡座を強いて座らせて、後ろ手に緊縛する。肩の高さまでねじ上げた手首を交差させて十文字に縛り、縄尻を胸の上下に巻いて乳房を絞り出すのは、昨日と同じ作法。さらに腰縄を巻き、後ろから前へ股間を通すのだが、縄を淫裂に埋め込まず、左右に分けて鼠径部を通した。

そうしてから梅女を吊り上げて、三角木馬の上に降ろす。猪世と小代が左右から脚を開かせて、元波が木馬の稜線をきっちり淫裂に食い込ませた。

「きひいいいつ、痛い……」

悲鳴をあげて身悶え……すると、いつそう食い込んでくるので、梅女は身体を動かさない。

「あれを一枚持つてきてくれ」

猪世と小代で、十露盤責に使った石板を宙に支えて梅女の足の裏にあてがい、元波が石

板に縄を巻いて足首に結びつけた。

「いざや」

猪世と小代が、さすがにゆっくりと石板から手を放した。ぐうっと梅女の身体が沈んで、木馬の稜線がいつそう深く淫裂を割った。

「あがつつ……」

痛い絶叫したいのに悲鳴が喉につかえて声にならない。

みしみしみめきと稜線がさらに食い込んでくるのは、事実なのか錯覚なのか。

「弥太郎よ。馬を追ってやれ」

良実が太刀持ちの小姓に命じた。

心得て、弥太郎が掛矢を持ち出してきた。両手で振るう大きな木槌は、普請にも作事にも重宝するが、攻城戦で門や塀を打ち壊すにも必須の道具だった。さらには、責問にも使えた。

弥太郎が木馬の後ろに立って、掛矢を振りかぶる。

「それっ」

掛矢を水平に振るって、木馬の端面に打ち当てた。

ゴンッ。

「いざやあああつっ」

梅女が、悲鳴ではない。獣のごとくに吠えた。

「ひいひいひい……」

それから、悲鳴が嬾々と続く。

前後に振れた稜線に縫処を切り裂かれたのだろう。鮮血の筋が太腿を伝い、木馬の木肌を染めた。

「もうひと叩き、くれてやりましょうか」

弥九郎も主君に感化されているのか、ただに阿おもねっているのか。

「いや。ひと打ちで良い。しばし休ませてやれ」

ほんとうに休ませるつもりか。皆を引き連れて、責問の間から出て行った。

ひとり、木馬の上に取り残されて。

「くううう……ひいいい……」

梅女口からは細い悲鳴が漏れるのみだった。なぜ、こんなことになったのか。それは分かりきっている。すぐにでも殺されるという窮地を、流されるままにしのいできて、こゝへ漂い着いた。ただ、それだけだった。

夕刻まで、梅女は木馬の上で呻吟させられた。それほど尿意が募らなくとも、わずかも堪えられずに垂れ流しの惨め——など、気にする余裕もなかった。

やがて、良実と弥太郎、それに辺延野と当塚が夕暮れの薄明りの中に姿を現わした。三人の御小姓も二人の郎党も供に付いていない。

弥太郎は大刀の代わりに、大きな盆を捧げ持っている。

辺延野と当塚が梅女の裸身を木馬から降ろした。高手小手に緊縛したまま、裸身を土間へ仰向けにして、両足をつかんで肩まで引き上げた。石板を吊るした縄が、まだ足首に絡みついてる。それを首の後ろで結び合わせた。

裸身は平らに折り畳まれて、淫洞も尻穴も真上を向いている。現代でいうところのマンガリ返しである。

良実が手ずから盆に載っている棒を取り上げた。一見すると、先が太くなった播粉木。その部分は胴回りが五寸はあろうか。この棒の用途は、濠門長恭の読者なら明白であろう。それにしても、直径五センチは、処女には無理な極太サイズといえよう。

しかし、その道具が凶悪なのは、太さではない。梅女の淫洞の奥に仕込まれていた暗殺用の武器、棘鞆が裏返しになって播粉木の頭部を包んでいた。棘鞆の袋口を広げるための鯨髭は抜き取られ、細引紐が巻かれていた。播粉木の雁首に相当する部分には溝が掘られているから、良実が目論んでいる用途に使っても、勝手に外れることはないだろう。

良実は、その凶悪な播粉木を梅女の目の前にかざした。

「……………」

播粉木の頭部から突き出ている十数本の鋭く短い針を、梅女は訝し気に眺めるだけで、これからおのれの身に加えられる凶行を理解できないでいる。

すぐに思い知るであろうと、良実も余計な講釈はしない。すっと手を下へずらして、播粉木の頭を縫処へあてがった。

「あつ………」

針に柔肌を突き刺されて、ようやく梅女は理解した。

「無茶です。お赦してください」

良実にとっては、女子の哀訴も悲鳴も、こよなき楽の音色である。播粉木を握る手をじわりと進めた。

梅女の縫処は木馬に傷つけられて血まみれ。その血が、いくらかは潤滑の役を果たした——とはいえ。極太の播粉木に淫門を割り開かれ、しかも針が容赦なく突き刺さり搔き筆る。

「わぎゃああああああつっ……」

梅女は喉から血をしぶかせるほどに絶叫した。

それでも足りぬとばかりに、良実は手首をひねった。播粉木がさらに淫肉を切り裂く。奥に突き当たるまで播粉木を進めて。今度はじわじわと引き抜きにかかる。

「ぎびいいい……ころしてっつ、ころしてくださいいいい」

「殺しはせぬ。おまえは、国嶺正雀から差し出された人質じゃ。これからも、松直君として丁重にもてなしてくれるわ」

縫処からの出血でも、あまりに大量であれば失血死にいたるであろう。だから、良実は播粉木を抽挿したりはせず、あつさりと引き抜いた。

「亮威よ。手当をしてやれ」

心得てござると、良実が立った後へ座りこむ。血まみれの淫部を真正面から覗き込む位置。腰に提げていた鹿革の袋の口を開けて、大盆の徳利から焼酎を注いだ。この袋は戦陣に携える水囊だが、他の使い方もある。

当塚は焼酎だけでなく、小皿に山盛りの練辛子をも水囊へ投じた。

傷を焼酎で洗えば膿腐れを防げるとは、庶民でも知っている。凄まじい痛みを伴うが、傷口に塩を擦り込んでも同じ効能があるとも。しかし、練辛子を焼酎に混じるなど、少なくとも金創医には思いも及ばないだろう。

焼酎にたっぷり練辛子を溶かしてから、水嚢に鹿角の水呑口を革紐で括りつけて。それを梅女の縫処へ挿入して——水嚢を握りつぶした。練辛子を溶かし込んだ焼酎が淫洞へと流れ込む。

「ぎやあああつつ……」

太すぎる播粉木に新鉢を割られたばかりか、針でずたずたに切り裂かれた肉穴に、呑んでさえも喉を焼く刺激の水が沁みこんで……再び、血をしぶかせての絶叫。

梅女は全身で悶える。しかし、高手小手に緊縛され裸身を折り畳まれ足を頭の横で固定されていては、せいぜい腰を激しくくねらせて男どもの目を愉しませるだけだった。

「わしを謀殺せんとした罪は、これくらいでは贖えぬぞ。もうしばらくは懲らしめてくれる」

梅女はいったん足の縄を解かれて。身体を伸ばした形に戻され、両足首をまとめて縛られた。その縄を、土間の一隅にある大樽の真上に設えられている滑車から垂れた鎖につながれて、足を上にして引き上げられた。背中が地を離れたあたりから裸身は斜めに引きずられて、まるで大樽に逆さ磔にされたみたいになった。

当塚が弥太郎に手伝わせて、裸身にあれこれと仕掛を取り付けていく。高手小手の縄を緩めて、昨日の責問に使った石板が三つに割れたひとつを二の腕と背中の方に押し込んで、改めて縄を絞った。

乳首と実核に風呂糸を結びつける。ぎりぎり根元を絞られて、昨日までの梅女ならそれだけで悲鳴をあげていただろうが、惨々の拷責に半死半生とあつては、わずかに呻いただけだった。あるいは、凄まじい苦痛の連続で感覚が鈍磨しているのかもしれない。

当塚が、腰に三つも提げていた百成瓢箪の瓢ひやくを外して、それぞれの風糸に結びつけた。満たせば五合から六合は入れられる大きさだから、それなりに重い。乳首はともかく（どこではないが、それ以上に）実核が引き伸ばされる。

これで準備万端。弥太郎を梅女のそばへ残し、当塚と辺延野とが合力していつそう梅女を吊り上げた。肌が太樽に擦られるのを、弥太郎は眺めているだけで支えてやったりはしなかった。

太樽に満々と張られた水面を見上げて、何をされるかようやくに理解した梅女。覚悟もつかぬうちに、するすると下げられていつて。

目の前が水灰色の幕に遮られて、顔が水に浸かったのだと知った。

ボココツと梅女は口から泡を吹いた。乳首が鋭く痛んだのだ。何をされているか解さぬうちに、実核も同様に苛まれた。

五合も酒が入るなら、空のまま水没させればそれと同じ大きさの浮力が生じる。あらかじめ石板を抱かせたわけだ。

しかし、痛みにかまけている場合ではなかった。息が苦しくなってくる。

この時代、水練は武術であった。漁民でもない限り、泳げる庶民などいなかった。だから梅女も、水没させられる前に息を吸い込んでおくなど思いもつかなかった。

それでも。水中で息をしようとすればたちまちに溺れ死ぬくらいは知っている。だから、息を止めている。しかし、息が続かない。頭がガンガン痛くなつて、水灰色の幕に小さな稲妻みたいな光が奔るのは、蠟燭の灯りばかりではなからう。

水に浸けられてから、果たして心の臓が百も拍ったかどうか。苦しさに耐えかねて、梅

女は一気に息を吐き出してしまった。そして当然に息を……吸いかけたとき。

ざばあつ。牛蒡抜きに引き揚げられた。

「げふつつ、はあはあ、げふつ」

わずかに吸い込んでいた水を霧のように吐きながら、梅女は息を食った。

「落とすぞ」

大声で告げられて。赦しを乞う暇いとまも惜しんで息を肺腑に溜める。

「よーいやさ」

掛声とともに梅女は吊り下ろされて。たちまちに膝のあたりまで水に没した。

今度は心の準備ができていた。から、どうなるものでもない。息を溜めただけ、苦しくなるのが遅れるだけだった。最後には根が尽きて、水中で息をしようとして、たちまちに喉が痙攣する。

その痙攣が全身に伝播して、水面が激しく揺れた。そうなって初めて。

「よーいやさあ」

引き揚げられる。

しかし、今度は水を吐いたり咳き込んだりしなかった。死んだ魚のようにぐったりしている。

弥太郎が背伸びして梅女の髪をつかみ、裸身が大樽の外へ降りるようにした。

当塚が片膝を突いて梅女の上半身を起こし、羽交い締めにして。立てた膝で背中を突き上げる。

げふつと梅女は水を吐いたが、息は戻らない。

辺延野が梅女の斜め前に立つと。水月みづおちへつま先を蹴り入れた。

「げぶふつつ、うべえええ……はあ、はあ」

おぼろにも気を取りもどし、九死に一生を得た思いで息を貪る梅女。

当塚が黙って鎖を手繰り始めた。足を後ろへ引かれて、梅女は前へつんのめる形で——咄嗟に身体をひねって、顔を地べたへ打ちつけるのだけは避けた。

そのまま引きずられ、逆しまに吊り上げられる。

「まって。もう、いやです。おゆるしくださいいっ」

半狂乱で懇願する声は、かすれてしやがれている。

「ちよっと待て」

良実の声に、二人の手が止まった。

「あまりに喉を痛めては、声が涸れたままになるやも知れぬ。鶯でさえも鳴き声を愛でられるからの」

「くちへんではなくさんずいでありましょう」

「たわけ。鳥ではないわ。牝犬であれば、口は二つじゃ」

つまり。くちへんに鳥の「鳴」ではなく、さんずいの「泣」であろうと辺延野が半畳を入れたところが、「哭」であるとか切り返されたという次第。ちなみに、西洋中世にあつては、わずか二十六文字を読めぬ騎士や貴族も少なくなかったという。

軽口を叩きながら、良実は袴に手をつ突っ込んで下帯を引き抜いた。

この時代に武士が愛用していたのは、後世にいう越中褌に酷似している。松平越中守より時代は遡るが、ニュートンが発見する前から林檎が地球に向けて落下していたのと同じ

理屈である。

なんとなれば。前垂れを長くして、これを引き上げて首に巻いておけば、わずかに緩めるだけで小用を足せる。合戦チャンバラにトイレ休憩は無いのだ。さらにちなむれば、袴も左右に分かれており、股の部分で重なり合っているにすぎない。したがって、大股開きをすれば褌が露出し、褌からは逸物が顔を覗かせているという次第。名和弓雄極大（御大の上位。御大の下位は御中）からの受け売りは、ここまで。

良実は下帯をくしゃくしゃに丸めると、なおも必死に慈悲をこいねが冀ねがっている口に突っ込んだ。

「もうおゆるしくださ。いっそ、ころして……もぼおお」

さらに下帯の紐で梅女の頬をきつく縛って、布を吐き出せなくした。

「むううう……まめえ……」

言葉にならない声を漏らしながら藻掻く梅女は、無慈悲に吊り上げられて。ざぶんと水中に落とされた。

水中で泡を噴き、息を吸いこみかけて喉を詰まらせ、全身が痙攣し始めてようやく引き揚げられ、必要とあれば乱暴に活を入れられる顛末は、先と同じである。それが、さらに三度も繰り返された。

羽交い絞めにされていなければ泥人形のように崩折れる梅女の首筋に、当塚は指を当てて脈を取った。

「もしも殿が、明日もこの女子で愉しまれたいならば、今日はここまででござる」
責め殺す一歩手前まで来ているという意味だった。

良実が淡々とうなずいた。

「松直君が人質として大切に扱われているところを表向きに見せぬと拙いからの」

「やはり、年内には事を構えぬおつもりですか」

尋ねたのは辺延野だった。

「今のままでは、小楠は国嶺に助勢するか日和見を決めこむであろう」

「しかし、当家からの誓詞を容れてくれましようか。なんとしても、国嶺には三の姫が嫁ぐのですから」

「ふん」

良実は梅女の前へ寄って、股間を足で踏み躪った。梅女は無反応。

「女子など、このように扱えば良いわ」

戦働きには頼みとし、嗜虐の盟友でもある辺延野だが、政の才は無い。それが、良実の辺延野への評価であった。

良実はわずかに足を引いて。指先で縫処の裂け目をくじっていたが、ふうと溜息をついて、足を引つ込めた。

「昨夜はともかく、昼の三人抜きがこたえておるわい」

この玩具にはもう飽きたと言わんばかりに熱のない声で当塚に言い渡す。

「朝からずっと木馬に座らせておったな。今宵は立たせておこう。雛飾りにしておけ」
「心得てござる」

辺延野と弥太郎とで、まだ土間の中央にあった木馬を片付けて、そこへ当塚が棒杭のような道具を据えた。方三尺ほどの分厚い台の上に、やはり三尺ほどの丸棒が突っ立ってい

る。棒の胴回りは五寸に近い。梅女の瓜を割った播粉木と、ほぼ同じ太さだった。

わざわざ播粉木を比較に使ったのは、この棒杭も同じように使われるからである。

梅女は手足の縄をすべて解かれたが、別の形に縛りつけるためではない。

俯せに寝かされて両手を横へ広げさせられて。肩、二の腕、肘、手首の四箇所を六尺棒に緊縛固定された。時代が下ると捕物などで常用される得物だが、この時代では殺生戒を守る僧兵に愛用されていた。それと、良実たちのような拷問愛好者にも。

天井の滑車から垂れる鎖に二本の縄が括りつけられ、それぞれが六尺棒の端へつながれた。そうしておいて、梅女を宙へ吊り上げて。良実が手ずからに棒杭を梅女の真下へ動かした。

梅女が下ろされていく。このままでは股間を串刺しにされると察して、梅女は足を閉じ合わせたのだが。良実と弥太郎に足首を引っ張られては、抗いようもない。

胴回り五尺の先端は丸められているが、それでも新鉢を割られたばかりの娘には苛酷を超えて非道だった。しかし、同じ太さの播粉木が棘まで纏いながら押し通ったのであるから。

めりめりみしみしとは、梅女の身体に響いただけで余の者には聞こえなかった。

吊り下ろされるにつれて、六尺棒は梅女の縫処へめり込んでいった。

「わぎゃあああつつ、ぎびいいいいつつ……」

口に詰物をされているとは思えない大声で、梅女は泣き喚き続けた。手で加減しながら挿入した播粉木とは異なり、棒と穴の向きが揃っていないくとも力づくに押し込んだせいかもしれない。関所の膜だけでなく淫洞の入口まで裂けたとみえて、破瓜を上回る量の鮮血

が、両の太腿を流れ落ちた。

梅女の足が台板に着く前に、鎖の張りが減じた。のが、手応えに伝わって。辺延野と当塚が手を止めた。この責のお手伝いも、これが初めてではないのである。言われずとも、弥太郎は五分厚の板を何枚も運んできた。一辺が一尺ほどの真四角。

梅女の裸身がわずかに吊り上げられて。またも両側から引つ張って開脚させて、その下へ板が重ねて置かれた。二度三度と繰り返されてから。これなら淫洞の行き止まりを突き破ることはあるまいと見当がついて。縄が鎖から解かれた。

「くうう……」

梅女が小さく呻いた。淫洞を貫く棒杭は、奥を突き破らんばかりに圧迫してくる。つま先立ちになれば少しは楽になるのだが、すぐに脛脛が引き攣れてくる。大きく開かされている脚を閉じれば……真四角の板を踏み外して、みずから串刺しになりにいくようなもの。腋の下に掻い込むように通された六尺棒に両手を広げて弥次郎兵衛のように固縛されているのは、腕の重みが肩の高さまで上がるので、見た目よりもずっと不安定だった。それでも梅女が転倒しないでいられるのは、皮肉にも、梅女を苦しめてというよりも犯している棒杭のおかげだった。

良実が言った雛飾り。この時代に座り雛はまだ登場していない。すべて立ち雛であった。紙を丸めた胴体ならともかく。手間暇を掛けた高価な雛は突っ支い棒を胴に差し込むなどして、倒れないようにしていた。

梅女は、まさしく生きている雛飾りだった。素っ裸とは、不敬も甚だしいが。

「今さらに気づきましたが。こやつに餌をやるのを忘れており申した」

ほんとうに手配を忘れたのか、わざと兵糧攻めにしたのかは怪しいが。当塚が言上した。

良実はチラとも考えずに言い放つ。

「二日や三日、食わさずとも差し障りない。水はたつぷり飲んでおろうしな」

水責で吞んでしまったどころか肺腑にも侵襲した水は、すべて吐かされている。だからこそ、生き永らえている。

土間の蠟燭がごとく消されて。太い棒杭に縫処を串刺しにされて立ち続ける娘の白い裸身が闇の中にぽつんと取り残される。そして、責問の間の戸が閉ざされた。

責問の間へ押し込められて二日目の夜も梅女は一睡も出来ず、苦痛に苛まれ通した。というのは、当人の感覚であつて。実際には、三度か四度は、絶え間ない呻き声いつくが一刻ばかり焉むときがあつた。日の出から日の入りまでを六等分した不定時法の一刻いつとき（約二時間）ではない。丸一日を百等分する定時法である。主に天文方の学者などが使っていたが、庶民にも無縁ではない。「一刻を争う」は約十五分（正確には十四分二十四秒）である。いくら昔でも、一時間の遅延を気にしないほど日本人はズボラではない。

わずか十五分ほどの寝落ち。そして苦痛へ引き戻される。

そうして長い長い一夜が終わって、朝の陽光が、太腿と棒杭を染める赤黒い血の染みと、全身に刻みつけられた一昨日の敲き責の痣を鮮やかに照らす。

それと、いまひとつ。朝の寒気に梅女が吐き出す白い息も無惨美をいつそう際立たせていた。

良実が二人の忠臣いと二人の郎党を従えて、もちろん太刀持ちの弥太郎も伴って姿を現わ

したとき、梅女に安堵と怯えが表裏一体に湧いた。

この責は、おそらく終わりになるという安堵。もつと残酷な責が始まるのではという怯えというよりは恐慌。

滑車の鎖で吊り上げる手間を省いて。郎党どもはゆっくりと梅女の身体を仰向けに倒してから、ずぼっと大きな音が耳に聞こえるほどの勢いで棒杭を引っこ抜いた。

口に ふんどし 布を詰められているせいもあって、梅女の絶叫は驚き声ほどにも大きくなかった。

「今日は何もせずに休ませてやつても良いぞ」

その言葉の含む意味には気づくはずもなく、男のダミ声が梅女には、極楽浄土の爽風が七宝の木々の枝を揺する音色にも聞こえた。

「……………」

梅女は懇願の眼差しで、男の顔を見上げた。

「赦して欲しくば、まず身を起こせ」

それが至難の不可能事だった。六尺棒の重みが頭を押さえつける。身体を曲げても足が浮くばかり。手を突いて身を起こせそうにも、両腕は広げられて六尺棒に固縛されている。

衰弱した身体でじたばたと藻掻くうちに。

「早うせぬか。もう我慢出来ぬぞ」

良実は背を向けかける。

ここで見捨てられたら、また夕刻までは捨て置かれる。渾身の力で藻掻く。

「ええ、面倒な。助けてやるわい」

辺延野が横合いから近寄って、背中につま先をこじ入れると無雑作に蹴り上げた。

梅女はあっさりと――両足を開いて投げ出し上体だけを起こした形になった。

その足の間に良実が割り込んで、小袖の前を引き開け下帯を寛げた。いきり勃っているのは嗜虐の悦か、ただの朝勃ちか。

主君の意を察して弥太郎が、ずっと梅女の口をふさいでいた詰物を引き抜いた。

「赦して欲しくば、しゃぶれ」

梅女の、もはや朱唇とは形容できぬ干からびた唇に、良実が怒張を突きつけた。

目の前に聳え立つそれが男の魔羅であるとは、いくら気が薄れていても理解できる。しかし、忌避の念は湧かない。これを口でしゃぶれば、今の責から解き放ってもらえる。そればかりか休ませてもらえる。素直に、そう信じた。

梅女は身を乗り出すようにして、良実の魔羅を口に入れた。しゃぶるのだと思い出して、ぎこちなく舌を這わせる。

がしつと頭をつかまれても、その意図を梅女は考えたりはしなかったのだが。

口中いっぱい熱い棒が幾分柔らかくなったと感じた直後。

じよろろろろ……奔流が喉奥に叩きつけられた。

「んぶぶつ……」

口を開けてのけぞろうとすると、頭を引き戻され、顔を下腹部に押しつけられた。

「逃げるな。吐き出すな。飲み干せ。昨日は水も与えておらぬ。さぞ、渴いておろう」

「んぶぶつ……」

吐き出してはいけない。飲み干さねば、雛飾りよりも厳しい責に架けられる。脅されず

とも、梅女は自然と悟った。そして。良実の言葉に違たがいはなく、詰物に唾まで吸い取られて、唇から口中喉奥まで乾涸くわくびていた。

強いられてではあつても半ばはみずから求めて、口中に溜ためまつてゆく尿を飲み下した。

ごくごく喉が鳴つて。極楽の川に流れる甘露水ゆばりもかくやという——美味に感じられた。良実が起きぬけを我慢して溜ためめていた尿を、梅女は一気に飲み干した。

「ありがとうございます」

阿る心動きがなかったとは言えぬが、考えるより先に言葉となっていたのだから、本心も相当に混じっていただろう。

良実が苦笑する。

「札を言われるとは思わなんだ。こやつ、渴すれば平然と盗泉の水を飲むと見たぞ」

ろくに読み書きも教えられずに捨て置かれていた梅女には、その意味が分からなかったが、貶められているとは見当がついた。だからといって、別に屈辱には思わなかった。

「約定じゃ。たつぷりと休ませてやるぞ。これまでは、木馬に座り、裏干物で宙に寝て、今朝までは雛飾りで立っておったな」

これから寝るまでを座って過ごしたいか。それとも立っていたいかと、良実はわざと梅女に選ばせる。ただし、座りたいかと尋ねたときは十露盤を足で踏みつけ、立っていたいかと聞いたときは天井から垂れる鎖を大きく揺らした。

「立たせておいてください」

十露盤責よりは吊責の方が耐えやすかろうと、梅女は判断したのだ。結果として、その判断は正しかったのだが。

梅女はいったんすべての縄を解かれて、開脚を敷いられることもなく、ただ立たされた。腕を後ろへ取られたが、ねじ上げられもせず、手首を重ねて縛られただけだった。これまでの仕置に比べれば格段に優しい扱いだった。梅女はの安堵は、如何ばかりだったろう。もちろん、それは一瞬の勘違いでしかなかった。

手首に鎖が巻きつけられて、チャリチャリと引き上げられていく。斜め上へ引つ張られるが、腕を上げ、さらに上体を倒していけば、どうということもなかった——のは、最初のうちだけ。

ある程度まで身体が倒れると、どれだけ腕を伸ばしても手首が上がらなくなる。さらに上体を倒すと、かえって鎖を引つ張ってしまう。

「くっ……」

肩をねじられる痛みは相当のものが、それでも四肢を引つ張って水平に吊るされるのに比べれば、肩へはせいぜい自身の重みしか掛からない。三日前だったら悲鳴をあげて赦しを懇願していただろう仕打ちを、梅女は小さな呻き声だけで耐えていた。

いったんは地面から足が浮いたのだが、鎖が二寸ばかり緩められて、踵まで地に着いた。鎖は、ピンと張ったまま壁の鉤につなぎ留められた。

つま先立ちをすれば、腕がわずかに下がって肩が楽になる。しかし、そんな姿勢は続けられない。足が萎えて肩に身体の重みがかかってくる。

どのように身体を動かしても苦痛は増すばかりなので、梅女は「て」の字を傾けたような姿勢から、びくりとも動けない。

それではつまらぬと、良実は背を向けて立ち去る。余の者も黙って従う。

そうして梅女はひとり、無惨に吊るされた形で放置された。肩の苦痛に苛まれるばかり。何も考えられない。しかし、さいわいにしてとすべきであろうか。

痛みが昂じても気を失えない。足を踏ん張れなくなれば、肩の痛みがはね上がる。とはいえ、気を確かに保つてなどいられなかった。すでに二晩をほとんど寝られずに過ごしている。

梅女は朦朧としたままで日中を過ごした。尿意を堪えるでもなく、気づかぬままに垂れ流して——日が暮れた。

深更。乳房をねじられ実核をつねられて、梅女は地獄の安逸から現世へ呼び戻された。部屋の中だというのに松明が灯されて。鬼のような形相が二つ三つと照らし出されている。言わずと知れた、良実主従である。その後ろには太刀持ちの弥太郎が控えているだけで、御小姓三人衆も御手伝の郎党ふたりの影も無い。

「弥太郎。あれを」

弥太郎が恭しく差し出したのは——なんと説明するべきか。形状でいえば、上下を逆さにした「へ」の字の屈曲部にいびつな鞠がくつついている。乾燥させた芋茎いもがらを編んで作られているが、ふにやつとした感じが無いから、苴棒が通っているのであろう。「へ」の字形とはいったが、両端は丸く膨らんでいて、左右をそれぞれに眺めれば魔羅に酷似しているのも道理で。

「おまえは、人質の国嶺松直として生かしてやる。じゃが、その形なりでは男には見えぬ」
胸は、おまえがしていたように晒布を巻いて潰せば良い。されど、ここはそうもゆかぬ

であろうと、未だに血がこびりついている淫門をくじった。

二日前であつたら魂消るような悲鳴をあげていただろう狼藉にも、今の梅女はわずかに腰が逃げて――肩の痛みに、それすらも妨げられた。

「そこで、これじゃ」

良実が「へ」の字形の道具を梅女の目の前に突き出した。

ようやくに気が確かになりかけている梅女だが、加虐者の意図はさっぱり分からなかった。

「とはいえ、こやつにも毛が生えておるからのう」

道具の屈曲部にいびつな毬がくつついているのは、先に述べた。その毬の付いていない、屈曲部の谷側には、芋莖の末端が集まってささくれが立っていた。

「じゃから、元からある毛の方は筆ってしまふぞ」

梅女が意味を解さないでいるのは気にも留めず、良実は事を進める。

鎖が緩められると、梅女は傾いている上体がさらに折れて、膝を屈して地に崩れた。当塚が手首の縄をほどき、辺延野が梅女を仰向けにした。

手足が引き伸ばされ、左右の手首と足首に縄が一本ずつ巻きつけられた。辺延野が梅女を抱え上げ、当塚と弥太郎で四肢の縄を引っ張る。良実が言うところの裏干物を表に返した形。

裸身は無理な逆海老に反らされるのではなく、自然に腰が沈んでいる。それだけ、梅女の負担も軽い。これまでの不自然な姿勢に比べてずっと楽になったので、今日初めての安堵の吐息が梅女の口から漏れた。

良実が松明を梅女の真上にかざした。松明を寝かせて、火頭を下へ向けた。ポタリと、溶けた松脂が裸身に落ちる。

「あついいつつ……」

良実の一挙一動を見守っていてもなお、梅女にとっては不意打ちだった。

「今日は休ませてくださると……もう虐めないとおっしゃっていたではありませんか」
掌返しに、つい詰るような口調になった。

「そうじゃ。日の入りを過ぎてまあ、二刻ほども憩わせてやったであろうが」

「……………」

今日とは、日が落ちるまで。0時とか25時とかの言い方がない時代には、それが日常の感覚であつた。つまり、良実が言を違えたとは言い切れない。

良実が松明を梅女の股間へ近づけて。傾きを変えたり手首をひねったり。溶けた松脂を淫埠といわず淫門といわず、たつぷりと垂らす。が、ひと垂らしごとに数拍の間をおいて、酷い火傷は負わさないように氣を使っている。

やがて、梅女の股間は冷めて固まった松脂に覆いつくされた。

「弥太郎よ。やってみるか」

声を掛けられて、太刀持ち小姓が主君と場所を入れ替わった。

「お二方のようにうまくは出来ませぬが」

弥太郎の顔は、辺延野と当塚へ向けられていた。つまり。こういった弄虐は此度が初めてではなく、以前にも——内実を明かせば、年貢を滞らせた農民の妻や娘、あるいは不始末をしでかした下女に、御仕置と称してやらかしていたのである。御仕置をされる者にし

ても、水責や木馬仕置よりは楽であつたろう。

弥太郎は松脂の縁に爪を立ててわざわざ剥がしてから。そこをつまんで、一気に引き剥がした。

べりべりべり……という音は、梅女の悲鳴に掻き消される。

「ぎひひひ……お赦してくださいっ」

良実の松脂を垂らす手際が良かったのか、はたまた弥太郎が門前の小僧であつたのか。凝固した松脂は、梅女の股間の形を保ったまま、一気に綺麗に剥ぎ取られた。

赤剥けの地肌が現われた。無理に毛根まで引き抜いたものだから、あちこちに血が滲んでいるが。梅女にこれまで加えられてきた拷虐の痕に比べれば、ささやかな惨状でしかなかった。

そして、もちろん。梅女への今宵の仕置は、これからが佳境だった。

ふたたび芋莖の双頭張形を手に、良実が梅女の腰の横に立った。淫門をくじり、彼にしては優しい手つきで実核を蹴ったのは、それでも憐憫の発露だったろう。梅女の思いには関係なく、淫洞がぬかるんでくる。

無理をすればなんとか突っこめる——という意味合いで、頃は良しと見てとると、「へ」の字の短い側を、良実は淫門に突き立てた。

魔羅よりも太い（棘鞘に覆われた）搦粉木で道を抉じ開けられ、さらには突搔棒でひと晩ずつと拡張させられていたとはいえ、未だ硬い淫洞に芋莖の張形がごりごりと捻じ込まれてゆく。

「ひひひひひ……」

梅女を啼かせるために、良実わざわざと張形を左右に捻じっている。芋莖から突き出ているわずかなさくれが、鋭い棘に搔き毟られて傷だらけになっている柔肉を――くすぐると表現しては梅女が可哀想ではあるが。淫囊ふべりに見立てた芋莖の塊が淫門に突き当たるまで押し込まれて。ようやくに良実の手が止まった。

しかし、まだ仕上げが残っている。毬の左右から垂れている細引紐が、腰ではなく左右の太腿へ、鼠蹊部に沿って巻き付けられた。これで、梅女が立って歩こうとも飛び跳ねようとも、双頭張形は抜け落ちなくなった。

朝から晩までゆっくり休ませてやったのだから、今宵は哭かせてやろう。良実が嘯いて、梅女をまた雛飾りに仕立て上げた。淫洞は張形で埋まっているので、立て具の棒は尻穴を貫いた。これで、梅女の初めては両穴とも魔羅ではなく道具で破られたことになった。

このように責め抜かれたのであるから。四日目の朝に、良実と辺延野、当塚と弥太郎に、文字通りに「罽」られたくらいは、詳述しなくても良からう。

このときも梅女は松直として扱われた。すなわち、淫洞の偽魔羅は挿入されたままで、口と尻穴を同時に犯されたのだった。怒張から奔る尿を飲まされ、魔羅よりも太い突搔棒で尻穴までも貫通された後であつてみれば、じゅうぶんに堪えられる凌辱でしかなかった。「女一つを男三つで囲む形にもしてやりたいところだが。松直君には縫処が無いからのう」良実の戯言は後々まで守られて、梅女は真の意味では男を知らぬままに生涯を終えることになる。

※続きは製品版でお楽しみください。